

教科横断型授業「中部アカデミックス」の取り組み 「白」をテーマにした授業実践（国語×美術）

富山県立富山中部高等学校

教諭 西尾 麻衣子

令和5年度1学年は、3学期に現代の国語で原研哉氏の「白」を学習している。原研哉氏は、1958年岡山県生まれ、日本デザインセンター代表取締役社長、武蔵野美術大学教授を務め、無印良品、森ビルなど数多くの企業や商業施設のビジュアルや広告を手がけており、日本を代表するグラフィックデザイナーである。彼の作品は、日本文化に根ざしており、「余白」「白」がキーワードとなっていることが多い。教科書「現代の国語」（数研出版）に掲載されている本文は、著書『白』（2008年刊）によるものであり、2009年東京大学入試問題の国語でも出題されている。本文は抽象的な表現が多く、生徒たちにとって理解しにくい部分がある。しかし美術に携わる立場の者がこの文章を読むと、様々な作品が映像として浮かび、抽象的な文章表現も理解しやすい。今回「現代の国語」の授業の中で、白色を基調とした絵画鑑賞を行うことによって、本文中の抽象的な言葉や文に対する理解を深めることができると考え、本校国語科担当の杉山耕平教諭との協働のもと、教科横断型授業を行った。

令和6年2月8日（木）に実施した授業（1コマ55分）の展開は、まず導入で、原研哉氏の作品を通して、彼のデザインに対する考えを生徒たちに伝えた。次に美術作品鑑賞の際に必要な知識である「抽象と具象」についてピエト・モンドリアンとヴァシリー・カンディンスキーの作品を紹介しながら説明し、長谷川等伯の松林図屏風から見る余白について問いかけた。その後、富山県美術館の所蔵作品の中から許可を頂いた2作品、千住博氏の『ウォーター・フォール』とサム・フランシス氏の『ブルー・イン・モーション3』の作品鑑賞を行った。鑑賞方法は4人ずつの10グループに分かれ、Google classroom jam boardを用いて生徒一人ひとりが感想を挙げて、それらをグループ内、そしてクラス全体で共有していった。2点の絵画作品については、作品の題名、作者名、コンセプトなどの情報は事前に伝えず、まず作品を見ながら感じたこと、そして本文を振り返りながら絵画を見つめ、「白は色であることにとどまらない」をキーワードとして本文への理解を深めた。



富山県美術館所蔵作品

千住博「ウォーター・フォール」

https://jmaps.ne.jp/5670/det.html?data_id=2627

サム・フランシス「ブルー・イン・モーション3」

https://jmaps.ne.jp/5670/det.html?data_id=276

授業後、生徒たちに事後アンケートを実施した。
以下がアンケート結果である。（対象生徒 75 人）

生徒の感想

「『白』はとても抽象的な表現が多く、想像するのが難しく内容を理解できていなかったが、今回の美術的観点からの授業を受けることで『白』の文中に出ていた例などを深く理解できてよかったです。また普段は体験しない授業方法だったので新鮮で面白かったです。」

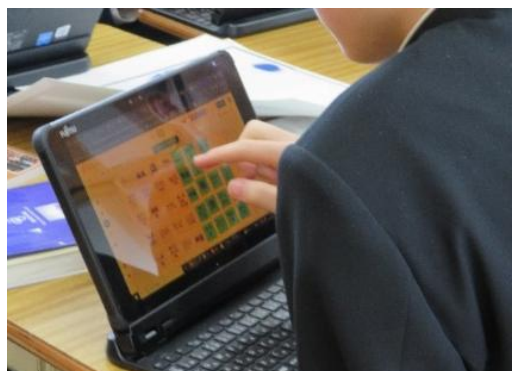
「このように教科の垣根を越えて学習をしてみて、今までとはひと味違った方法で理解をすることができました。『白』という色は、やはり文字だけでは捉えにくいものなので、絵を交えて考えを深めることができ、『白』の奥深さを体感できました。」

「『白』の文章を読んでいて、白は顕在性を表すなどわかりにくい箇所があり、イメージがわきにくかったが、この授業を通して白の持つ『いちじるし』というイメージが分かってきた。」

「これまでの読解では『白』への筆者の考え方が文章を通してしか読み解くことができず、あまり『白』への理解を深めることができなかったが、今回美術というものを通して筆者が『白』をどのように考えているのか理解への手助けとなった。また絵画を介すことで、実際に筆者が述べていた白の特性である顕在性、存在性を知ることができた。」

「絵画の鑑賞を通し、一つの絵に対して特に『白』の捉え方について様々な解釈に触れることができました。国語と芸術という教科を超えた学びによってさらに現代文の捉え方が深まりました。他の教科でもこのような試みをしてみたいです。」

「文字では伝わらない白の特徴がよく分かりました。『ウォーター・フォール』を一目見たとき、白が発光している様、顕在性が一気に目に飛び込んできて、白の特別さが伝わりました。絵画における白は他の色では表現できない高度な意味、例えば、神秘的な雰囲気、何かが始まる感じを持っているのだと思いました。」



Google classroom jam board を用いて作品
についての感想を挙げていく。



「『白』は単独では、何も表さず、無にしかならないと思ったが、今回の作品鑑賞や『白』の文章から『余白』だと、そこから何かが始まりそうな感じや動きなどを表すことができると知り、同じ『白』でも全然違う印象を受けました。『白は色であることにとどまらない』という文について、身をもって知ることができました。今回の授業を思い出して、今後の授業での理解を深めたいです。」



「2つの絵画作品で白の使い方が違うように感じられたが、どちらも余白をつくるための白であり、存在感があった。言葉だけでは伝わりにくい抽象的なもの・ことを、作品を通して、自分のイメージの中に取り組めた気がする。言葉だけからそれらをつかもうとするのではなく、他分野からもアプローチすると、もっと多面的に文章を捉えることができ、理解も深まると思いました。」

「著者原研哉さんについて詳しく知ることで、『白』に込められたメッセージがより理解できた気がします。一見この文章とは関わりなさそうな美術作品にも、筆者の主張と通ずるところがあることを実感して、『白』という概念がより魅力的に感じられました。普段生活している中でも、抽象画のように自由に物事を捉えて、その世界を楽しみたいと改めて思いました。」

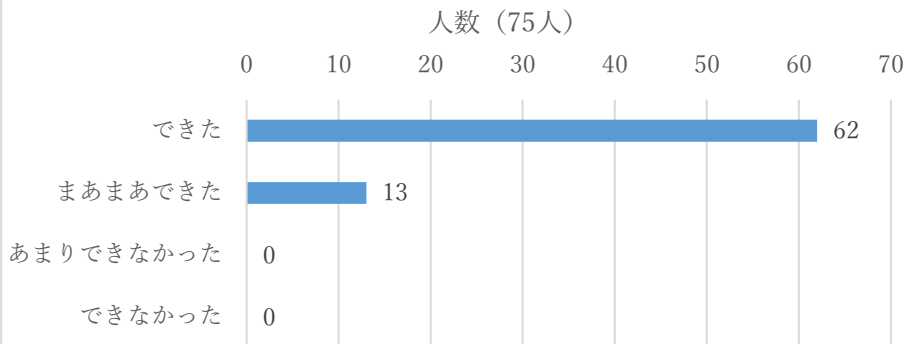
「正直この授業を受ける前までは『白』を読んでいて何となく分かる気がしつつも、抽象的すぎてあまり文中に書かれていることを実感できませんでした。しかし美術で学んだことを生かし、実際に作品を通して『白』を見ることで文章に書いてあることを実感できました。美術で学んだことが国語と結びつくことで理解が上がったし、逆に国語で学んだことを通して鑑賞すると、絵画を違った視点で見ることができておもしろかったです。教科の垣根を越えて学習することで新しい発見ができるので、とてもよいと思いました。」

「『白』や先生のお話から、余白により注目して絵画鑑賞をすることができました。またグループ活動で、班員の独創的な意見を聞いて、絵を見るとき視点を増やすことができました。普段あまり交わることがなさそうな国語と美術のコラボレーションはとても面白かったです。」

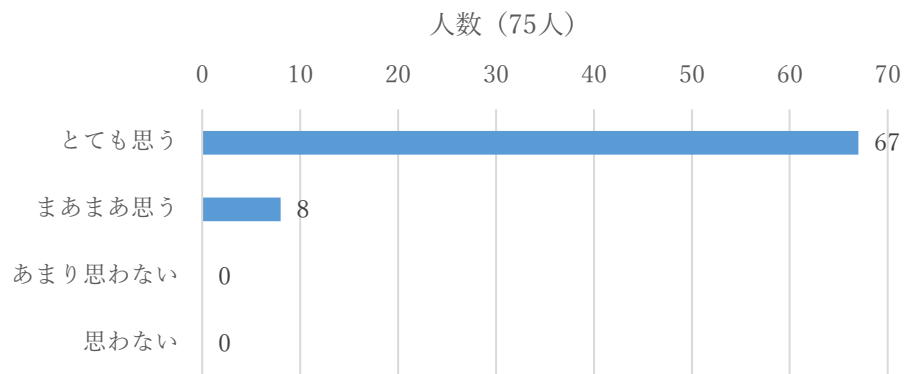
「1点目の作品『ウォーター・フォール』は黒と白の対比から、混沌の中から白が突出する瞬間や、白が輝くイメージが実感できたし、2点目の作品『ブルー・イン・モーション3』の余白からは、白の不在性をイメージすることができた。『白』を読んでいなければ、『ブルー・イン・モーション3』に生命的な何かを感じることもなかったと思う。」

「美術はこの世の森羅万象全ての物事を網羅していると感じました。余白の美について深く学ぶことができました。また『白』の特徴についても学ぶことができました。」

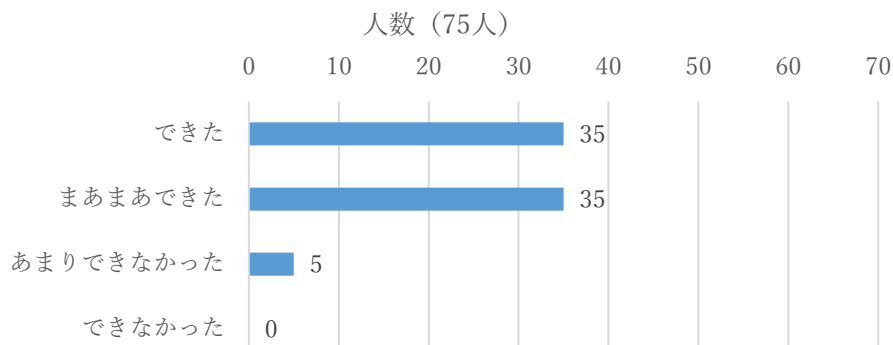
1.国語と美術の教科横断的な学習を行い、分野を超えた繋が
りを感じることができましたか？



2.分野を超えて物事を捉えたり、考えたりすることによって
学びが広がったり、考えが深まったりすると思いますか？



3.美術鑑賞をすることによって、原研哉著書「白」をより深
く理解することができましたか？



4.原研哉氏著書「白」を学習してから美術作品の鑑賞を行うこ
とによって、作品をより深く鑑賞することができましたか？

